

山梨県中央道埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書
—大月市地内2—

1975.3

日本道路公団東京第二建設局
山梨県教育委員会

序 文

中央道建設は県の東西から日夜工事が進められ、この完成によって県下の産業経済は言うまでもなく、文化の新しい波が続々と押し寄せてくるものと思われますが、こうした開発には必然的に自然景観の破壊や、文化遺産の消滅が伴うもので、いわば進歩のための破壊とも言えるものもあります。

しかしながら、私達県民に残された文化遺産を、ただ破壊してしまうのではなく、記録できるものは調査し、図書として永く後世に伝えなければなりません。それが今日の責任でもあり、当然のこととして、道路公團と委託契約を取り交し、埋蔵文化財の調査を行なってまいりました。

昭和46年度には大月市大月町真木字沢中原遺跡、初狩町藤沢字寺門遺跡の調査を実施し、48年度は大月市大月町真木字原平遺跡の調査を行ないました。又、49年8月に工事中発見された笛子町吉久保遺跡があり、今回は48、49年度の報告書となっております。

原平遺跡は広大な面積をもつ縄文時代から平安時代に至る遺跡で、笛子川左岸の段丘上に位置しておりますが、今回の調査では段丘先端部だけ調査範囲になったため、土壙群と地下式土壙の遺構が発見されました。又、吉久保遺跡は三床の地下式土壙が発見され、地下式土壙の特徴を知る上で、原平とともに重要な資料であります。したがって今度、この周辺地域の開発には充分留意されるよう、関係各方面の方々にお願い申し上げます。

調査にあられた先生方を始め、学生や地元の方々の御協力に厚く感謝申し上げます。

昭和50年3月

山梨県教育委員会

教育長 丸 茂 高 男

目 次

1. 吉久保遺跡	3
2. 原平遺跡	9

凡 例

1. 日本道路公團を委託者とし川梨県教育委員会を受託者として昭和48年度に契約された原平遺跡と、昭和49年8月に工事中発見された吉久保遺跡の報告書である。
2. 原平遺跡は、金田頼貞、川崎義雄、重住豊が担当し、吉久保遺跡は末木健が担当した。

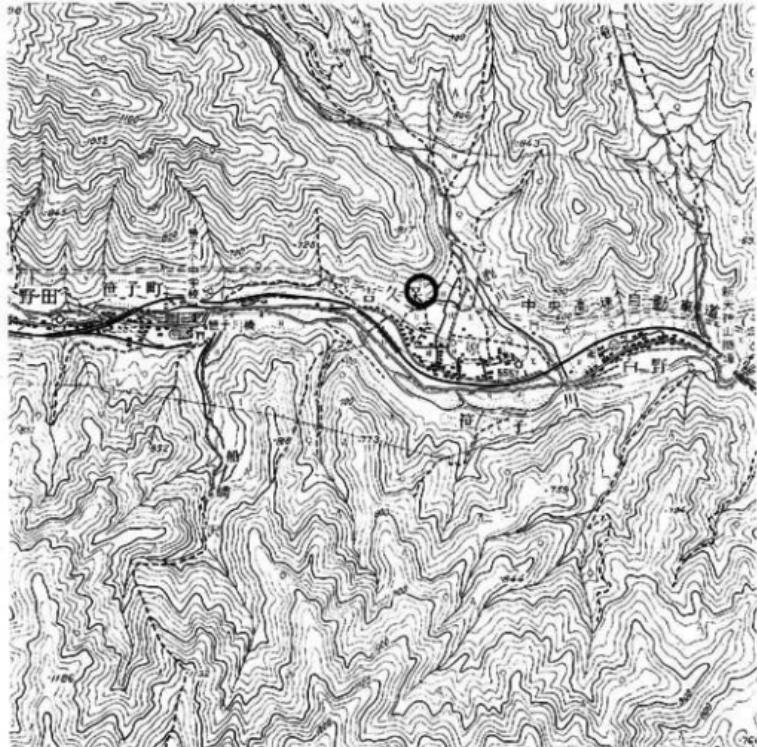
吉久保遺跡調査報告

1. 遺跡の地形と概要

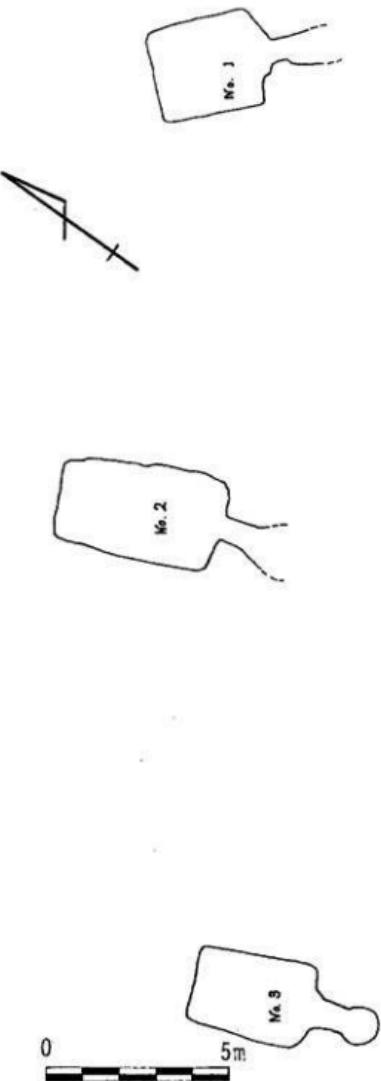
笛子川沿いに西へ甲州街道を登つてみると笛子町の手前の原部落にでる。原部落は大鹿川が形成した扇状地端の笛子川にそって、旧街道町並で東西に長い部落である。扇状地はその頂から端まで約130m、東西150mの巾をもち、標高625mの頂から笛子川河床まで90m以上もある相当な急斜面である。

部落西側には稻荷神社があって、扇状地西側にそって登る小路がある。この路のすぐ上、標高605mのコンタに並んで発見されたのがこの吉久保遺跡である。工事中に落盤して発見された3基の地下式土壙は砂疊含有ローム層に掘り込まれたもので、以前にも神社より西側の山裾から2基が発見されている。

地下式土壙は入口部が垂直に掘り込まれ、直径1m位の円形で、深さ2~3mの所で直角に曲り、水平に1~1.5m掘り進まる。奥室は広く巾3m長さ4mから5mになるものもあって床は平らで、天井はムード形になる。遺物は全般的に少なく、皆無のものも少なくない。特徴としては甕土が奥室



第1図 吉久保遺跡位置図



第2図 吉久保遺跡遺構配置図

内、あるいはL字形部の堆土中に層をなして発見されることがある、入口部が階段状になるものや、閉塞石のようなものがある場合もある。正式報告された例は少ないが、その分布範囲は東京西部から本県一円に広がっているものと思われ、東京都小金井市前原遺跡（考古学ジャーナル67号、前原遺跡調査団）では陶器片等の出土品があって、鎌倉～室町時代に位置付もできるが、その性格については不明な点も多い。県内で発見されているものの正確な数は把握していないが、上野原町、大月市、都留市、富士吉田市、大和町（1967.12、調査、飯島進、上川名昭）勝沼町、八代町、境川村、高根町、白洲町、武川村、長坂町、小淵沢町などで発見されている。

奥室の壁、天井には巾5～10cmの鋭利な鉄製刃物（銀あるいはヤリがんな様のもの）の痕が残っており平安時代以降に位置付けられるものと考えている。

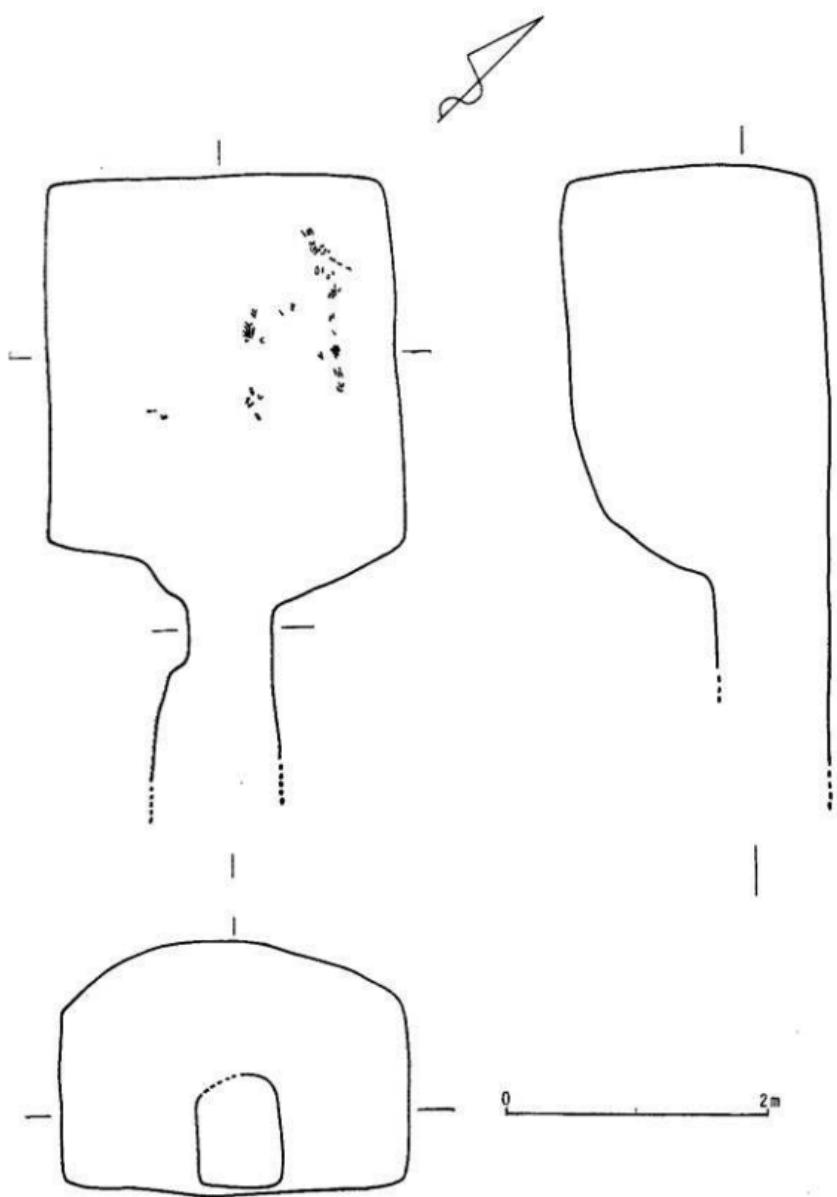
吉久保遺跡発見の3基は、大月市教育委員会の追跡によって昭和49年8月3日現地踏査を行ない、8月9日に大月市文化財審議員金田頼貞氏が工事作業員の手を借りて埋土の発掘をされ、8月15日に文化課末木と明治大學生米田明訓、野口行雄、井川達雄の4名で測量、実測を行なったものである。

1号地下式土塙は入口の巾60cm、高さ90cmで奥室は巾260cm、長さ280cmで、東側床面に木材片が若干残っている。高さ2m弱でドーム型天井をしている。入口部が破壊されており、横穴式の入口部のかし字型入口をもつものか不明である。

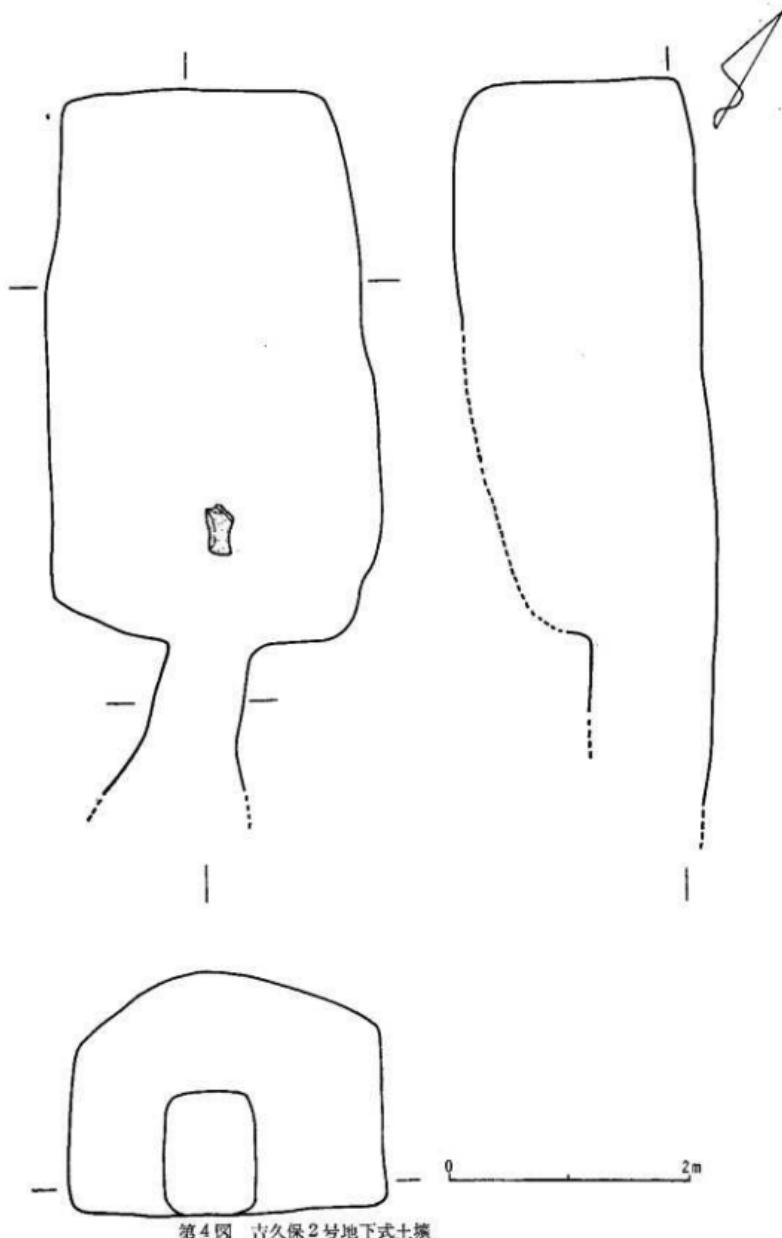
2号地下式土塙は天井部前面と入口部が破壊されているが3基中最大の規模のもので、入口部はやや斜めに開けられ巾70cm、高さ1m、奥室巾270cm、長さ460cm、高さ2mを計る。天井はドーム型で、側壁140cmは垂直である。床面はほぼ水平であるが、入口から約1m奥に入った所に40cm×20cmの石が床面に置かれている。

3号地下式土塙は地下式土塙の姿を明確にもつもので、入口部は直径1mの円形で垂直に弊穴が掘られ、巾70cm、高さ1mの狭道が1m程水平にのびて奥室になる。巾240cm、長さ340cm、高さ170cmの長方形の奥室がある。入口部から奥室に入るにしたがい低くなってしまい、奥壁は天井まで垂直に立つ。

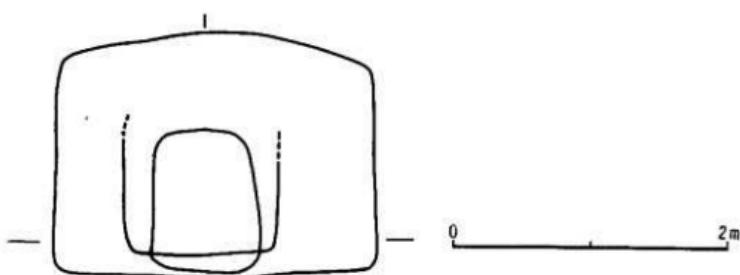
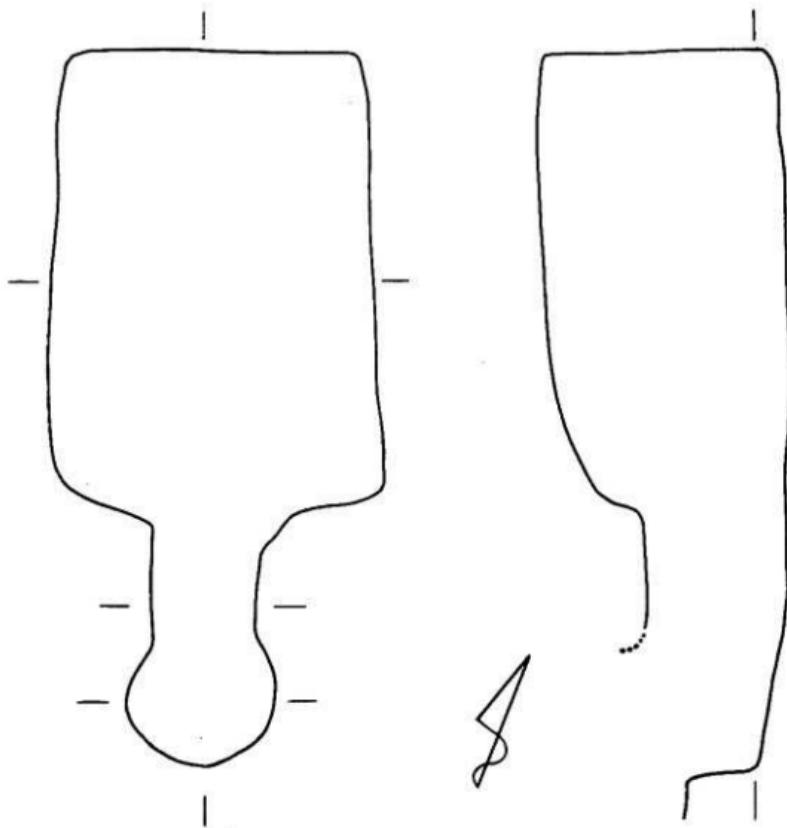
3号の例からいざれもL字型入口部を持つ地下式土塙と思われる。
(末木)



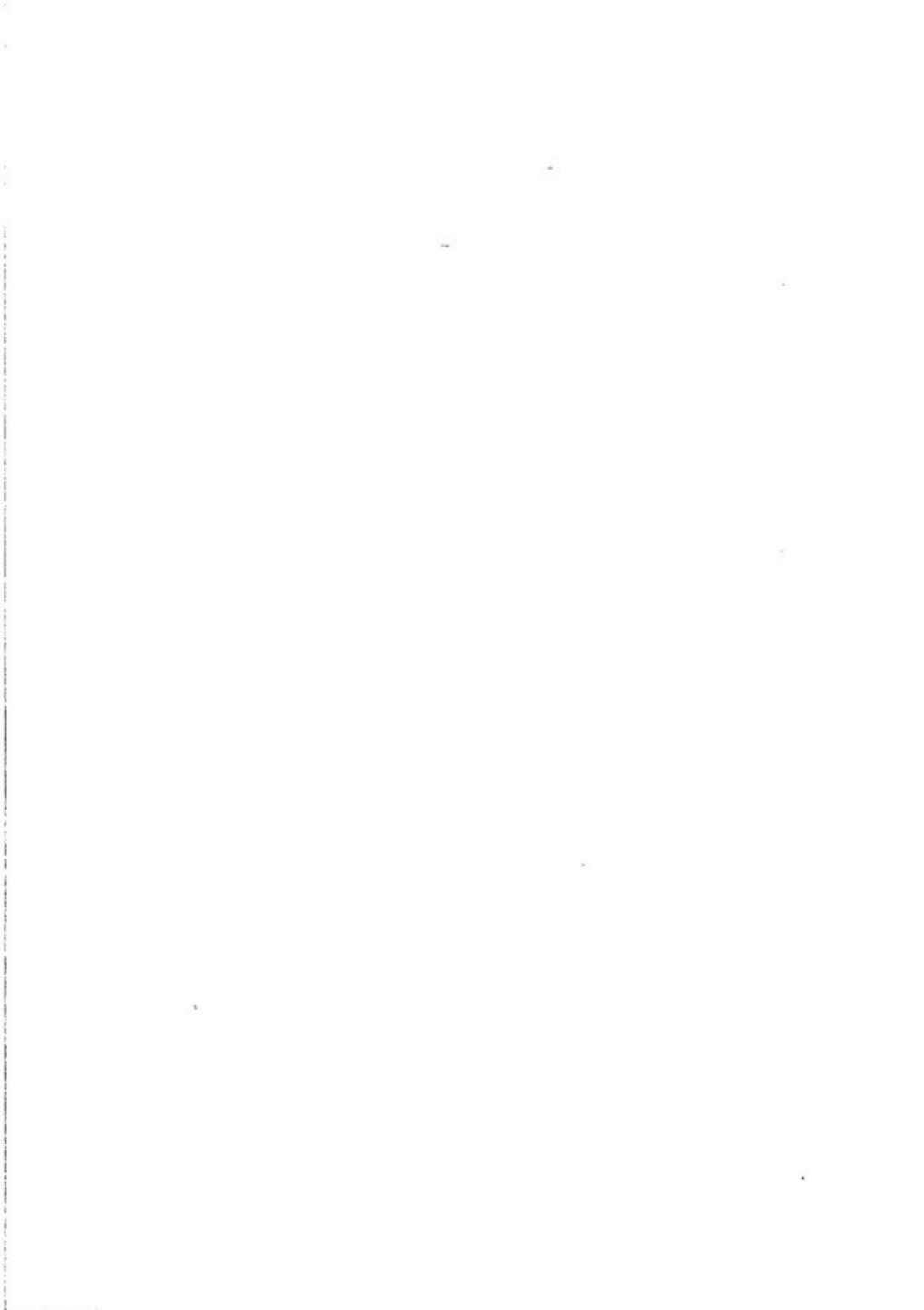
第3圖 吉久保1号地下式土窯



第4図 古久保2号地下式土塙



第5図 吉久保3号地下式土壤



原平遺跡発掘調査報告

例　　言

1. 本書は、中央高速道建設工事にかかる埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 調査は、昭和48年7月28日から8月9日までの13日間実施した。
3. 発掘は、山梨県教育委員会より委任を受けた遺跡調査隊が、地元大月市教育委員会の協力のもと実施した。
4. 出土品の整理は、調査員の指導のもと県立都留高校生が援助した。
5. 本書の執筆には、金田順貞、川崎義雄、重住農の3人が共同執筆をした。
6. 発掘参加者は巻末に記した。

目　　次

例　　言

1. はじめに	11
2. 遺跡の環境	12
3. 発掘経過	14
4. 遺構	16
A、ピット群	16
B、地下式土壙	17
5. 出土遺物	19
A、繩文式土器	19
B、弥生式土器	21
C、土師式土器	22
D、陶器・古錢・石器(石錫)	25
E、石器(石斧・凹石・磨石)	27
F、石器(石臼)・布・木の実	29
6. まとめ	31
参加者名簿	32

1.はじめに

山梨県遺跡調査団は、段丘全体が遺物包含地であり、「風土地の丘」として保護してもよい地域として評価し、昭和44年8月その報告書を提出了。

この後、山梨県教育委員会においては、中央高速道をはじめとする大規模な工事などによる埋蔵文化財対策として、山梨県遺跡調査団を発足させた。

昭和46年、原平遺跡への中央高速道通過の全貌が明らかになったので、調査団にはかり、調査計画を樹立し、体制を整え、各関係方面と接衝し、密接に連繋を保ちつつ、昭和48年7月記録調査として発掘調査を行なうことになった。

調査団の編成

団長 井出佐重

調査員長 金田頼貞

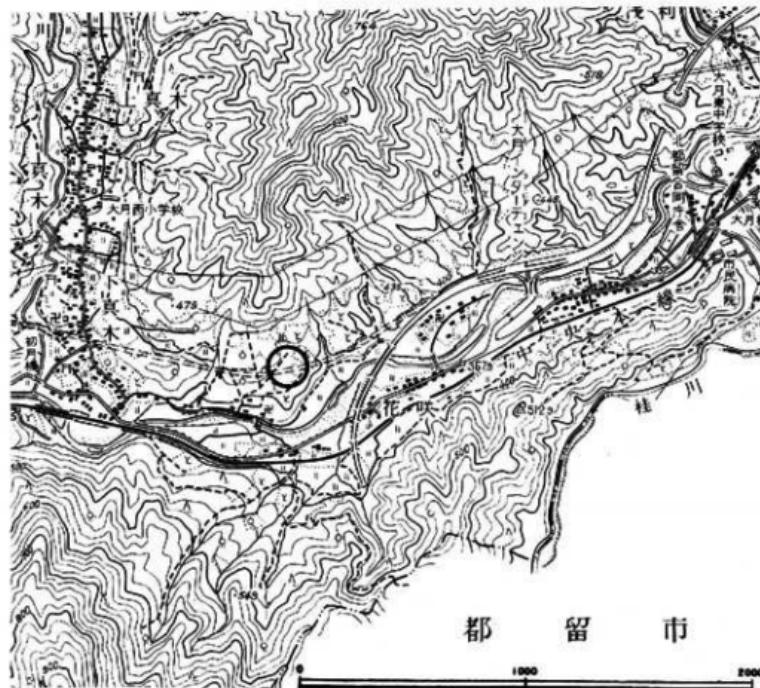
調査員 池田敏雄 石井深 大野四郎 奥隆行

金森辰政 川崎義雄 小林岳 小林利久

佐藤禪光 重住豊 鈴木武雄 中村嘉子

羽田貞義 矢崎勉

なお発掘調査中は、付近の人々から果実など多くの差入れがあった。特に宿舎になった善福寺の前田御一家から多大な援助があった。合せて感謝する次第である。



第1図 地形図(○印原平遺跡)

2. 遺跡の環境

桂川は、大月市大月町付近で笛子川と合流する地点で、それまで東西方向の向いて流れていたものが、急に南西に変え、御坂山地に延びている。

笛子川は、桂川の延長に、関東山地沿いに東西方向を保ちつつ、水源地笛子ヶ峰に延び、その延長線2.8km付近の河岸段丘に原平遺跡は位置している。

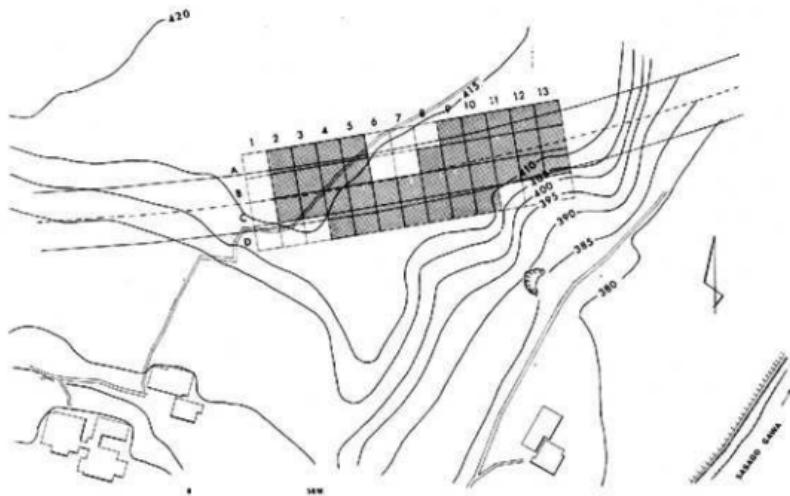
笛子川は、この付近で北から南下する真木川と合流し、扇状地、河岸段丘の複合地形の沖積平野を形成し、古くより集落が発達している。

真木川と併行して南下する溪流男川（前沢川）は段丘を侵食し、原平段丘と真木段丘を区切って笛子川に合流している。

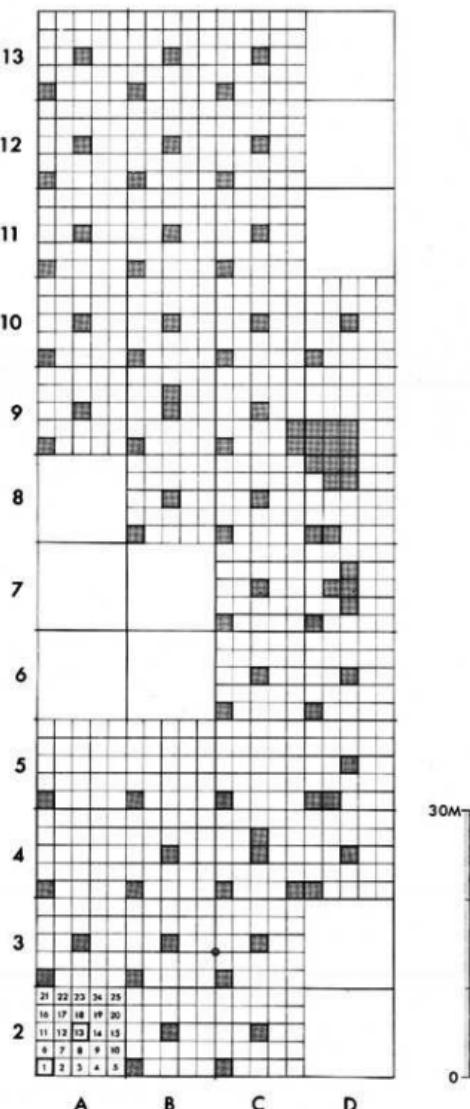
現在、前沢の集落は、段丘斜面に南面して立地しているが、古くは段丘上に位置していた。また現在、真木段丘に位置している源訪神社の旧地もあり、段丘斜面の松葉山善福寺も、古くは段丘上にあったと伝えられている。

段丘面は支水性のため、水田はなく、普通畑、桑園に利用されていたが、最近果樹園として、梅桃が植樹され、家屋は日当らない。

なお段丘は、標高400～430mで段丘上一帯に遺物が散布し、昭和38年度の遺跡分布調査では縄文時代後期の遺跡として報告されている。



第2図



3. 発掘経過

今回の原平遺跡発掘の期間中、台風6号による降雨、またほとんど毎日午後から降る、一時的な強い雨などによる天候の影響により、発掘予定のグリッドの消化が精一杯の結果となってしまった。しかし、その中で地下式土壙、ピット群の遺構を確認することができた。そこで発掘経過の概略を記してみたい。

7月28日（晴）午前中、現場において発掘事項の確認、器材の点検の後、発掘区域内の草刈りと平行して基本杭とグリッドの設定を行う。

7月29日（雨）台風6号の影響で朝から強い断続的な雨の中で、一部グリッドの発掘と昨日同様に杭打ちとグリッド設定を行うが、午後は雨で作業中止。

7月30日（雨時々曇り）昨日からの雨で作業はほとんど進展しなかったが、昨日までに設定したグリッドの表土を剝ぐ。

7月31日（晴）前日に続き各グリッドをローム面まで掘り下げるが遺構は確認されず、遺物も纏文・土師の土器片が各グリッドで数片出土するのみである。

8月1日（晴）新らにグリッドを発掘する一方、杭打ちと草刈を平行して行うが、柔の伐採に時間を費やすこととなり、作業の進展はほとんどみられなかった。

8月2日（晴）昨日設定したグリッドを発掘したが遺構は発見されず、遺物もほとんどが土師の少片で数も少ない。

8月3日（晴のち雨）新らにグリッドの設定を行ないつつ他のグリッドを発掘する。午後は雨のため作業中止。

8月5日（晴）D-7-13区において縦150cmほどの円形の落ち込みを確認する。午後には落ち込みが160cmほどの所で横にのびることが判明し、地下式土壙であろうと推測される。

8月6日（晴のち雨）昨日確認された地下式土壙は70%ほど掘り進んだが遺物が少なく木炭が多量に出土する。同時に、東側にはピット群が確認される。

8月7日（晴のち雨）土壙内の耕土作業を行うが雨のため進展しない。土師片が出土する。

8月8日（晴）昨日同様に土壙内の耕土を続けるが雨がたまり作業はあまり進展しなかったが、午後には耕土作業は終了し、ただちに測量を開始する。ピット群の測量は終了する。

8月9日（晴）土壙の測量を残すのみとなり、一部グリッドを埋めもどし、午後には測量も完了し、器材の点検をした後、すべての作業を終了する。



遺跡の遠景



発掘風景



グリッドの設定



山梨県教育長清水林星氏などの見学



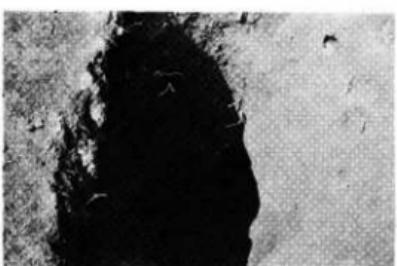
グリッドの設定



地下式土壤の測量風景



発掘風景



地下式土壤の導入部

4. 遺構

A ピット群

遺跡南側で確認されたこれらのピット群はC 9-5・10、D 8-17・18・21・22・23、D 9-1・2・3・6・7・8区の各グリッドにかけて発見されたもので計47個を数えることができた。そのうち焼土を有するピットが1個確認されており、そのほかに三カ所の焼土（炉址？）も確認された。

しかし、発掘日数などの諸条件からこれらピット群全体を発掘確認することができず、ピット群の範囲などを把握することは不可能であったが、確認された範囲内において幾つかの形態に分けられるものと思われる。

前記したようにピット群の確認された地点が遺跡のもっとも南側に位置し、土層の深い地点で約60cm、浅い地点では約20cmほどでローム層に達する。このように他のグリッドにくらべ比較的に浅いため、遺構上部の各層は、そのほとんどが柔の根による擾乱を受ける結果となっていた。

したがって、確認された各ピットの新旧時代差は出土遺物がほとんどないことから明確にすることできなかった。しかし、形態的に三形態に分けることができるものと思う。

A いわゆる土壤状のプランをしたもので、D-8-17区において確認され掘り込み部分、下底面とも横円形をした大形のピットであり、N-29・30がこれに該当するものと思われ、30の下底部から炭化したクルミ・核の種子が出上している。

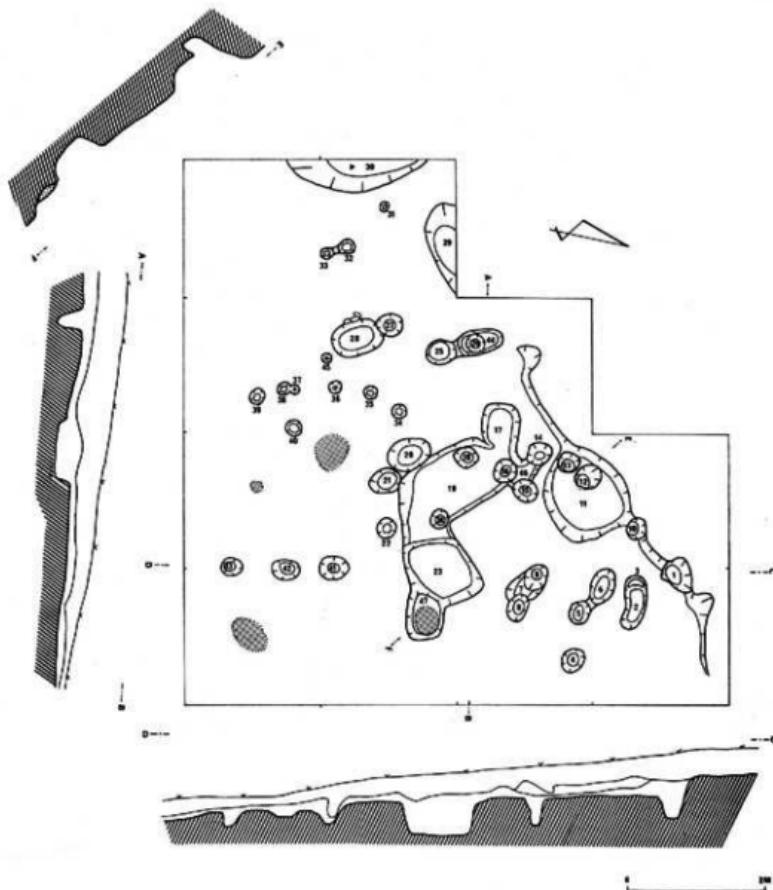
B 比較的大形のプランであり、深さ70cm～100cm前後の深さをもつもので、No11・17・19・23・43が、これに該当するものと思われ、とりわけ11・19両ピットは小堅穴状のプランを呈し、大形の割には70cmと比較的浅い掘り込みである。

また、これらに属する中で、47は焼土を有する唯一のピットであり、他のピットには見られなかつた。

C 前記の部類に比らべ比較的小形であり、直径15cm～40cm前後のピットである。これらのピットは、大きさ（直徑）の割りに深いものが多く、21のように径約40cmで深さ135cmを始めとして1mを越すピットがある。

これらの小ピットが11・19の小堅穴状遺構と重複していること、しかもその重複が不規則なことなどから、これらピットの性格、時代差が明確にされるものと思う。しかし、ピット群の確認された地点は擾乱を受けていたこと、遺物の出土がほとんど無かったことから土壤状ピット、小堅穴状ピット小ピット群の形態、年代差は明確にしえるものの、年代順は明確にすることはできなかった。

また、47のピットとともに発見された焼土の他に、D-9-2・3・7各区において焼土が確認されているがこれらのピット群にともなうものかは明確ではない。



B 地下式土壙

D 7-B グリッドのほぼ中央で、確認された遺構で、地表面から約80cmの深さにローム層面にあたり、導入部はそこからはじまり、玄室は、そのグリッドから、さらに北東よりにのびている。

導入部の口は、ほぼ方形に近い平面形をし、その直径は約1.80mを算する。

導入部は、深さ約1.80mで次第に細くなり、スラップ状をつくり、玄室へと入る。その下底面までは、約2.40mあまりもある。つまり玄室は、ローム層面から約1.90mのところで、天井となり、北東に向かって横にのびている。

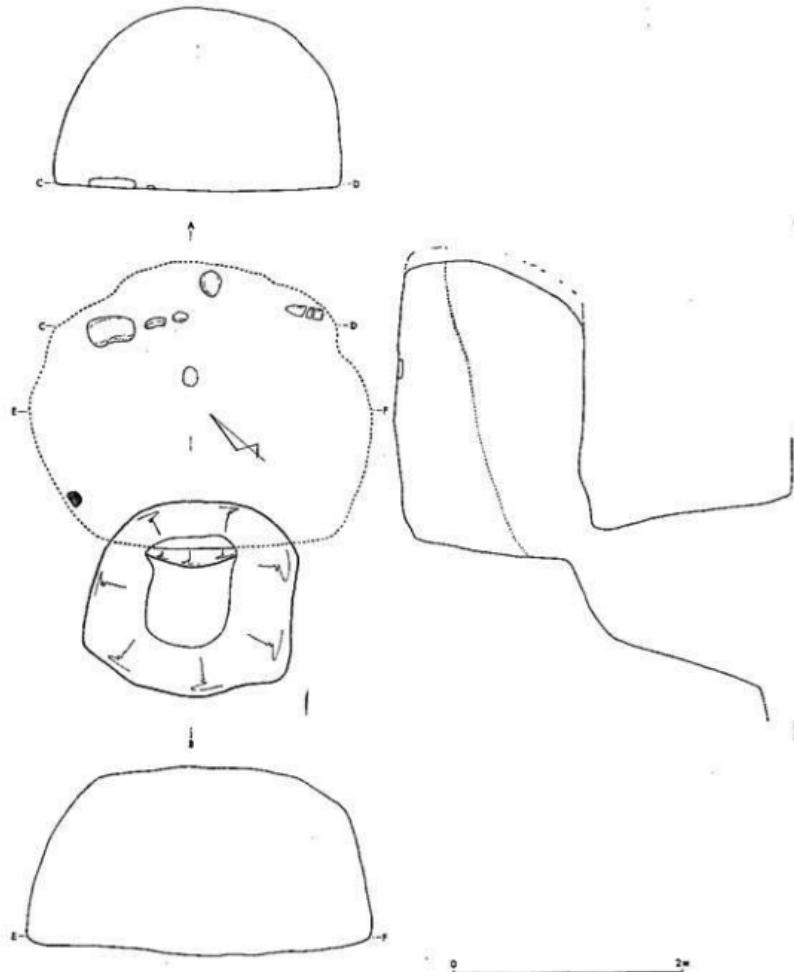
玄室は、ほぼ円形に近い平面形態をとっているが、奥壁に近かいところで、2段の凹凸部をもつ

ている。下底面での長さは約2.20m、巾3.00mで、幾分横に広い。玄室の高さは、約1.80mを数える人がちょうどたてる状態となっている。

天井の断面は、中央部で、やや台形をし、奥壁に近かいところでは、カマボコ状を呈している。

発掘時での土層は、導入部は、比較的粒子の細かい、ねばりのある黒色土がつまっていた。その土は、玄室の中までび、約半分（波線の部分）ほどつまっており、上半分は空間になっていた。

下底面からは、炭化した布が、向かって左隅の入口付近に、石の上にこびりつくように出土した。奥壁に近かい所では、数個の人頃大の、比較的扁平な石が雜然とおかれていた。その中には「石臼」の破片が含まれていた。上器はほぼ中央部で一括して出土した。



5. 出土遺物

A 裝文式土器 (第6図)

1 類 土 器 (1)

地文に縄文を施し、その上にヘラ状工具による刺突文が点列している。

2 類 土 器 (2)

竹籠状工具で器面に条痕を地文とし、貼付文を要所要所にもっている。黒褐色をよく焼きしまっているが、砂を比較的多く含む。諸磯C式土器に対比できる。

3 類 土 器 (3)

口縁部裏側にやや厚みをもち、渦巻文 (?) と、三角形の印刻文がみられる。茶褐色をし、器面は整形されている。中期初頭の五領台式土器に対比できる。

4 類 土 器 (4)

中期阿玉台式土器の胴部破片と思われ、心もちもりあがった隆起文がみられ、結節竹管文がそれをとりまいている。

5 類 土 器 (5)

縄文と広い無文部とが交互するもので、加賀利E2式土器に比較できるだろう。

6 類 土 器 (6.7)

縄文だけのものを本類とした。いずれも中期後半期のものと考えられる。

7 類 土 器 (8.9)

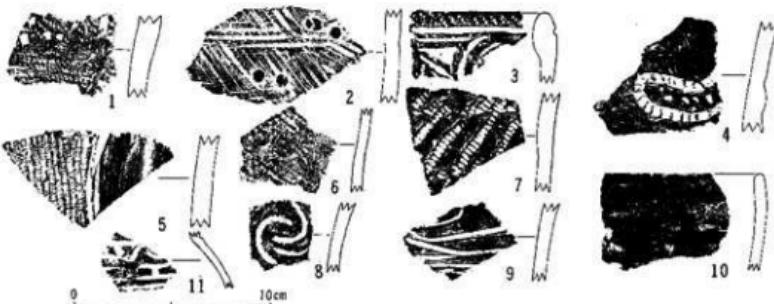
沈線文を主体としたもので、いずれも砂粒を多く含んでいる。晩期の所産と考えられる。

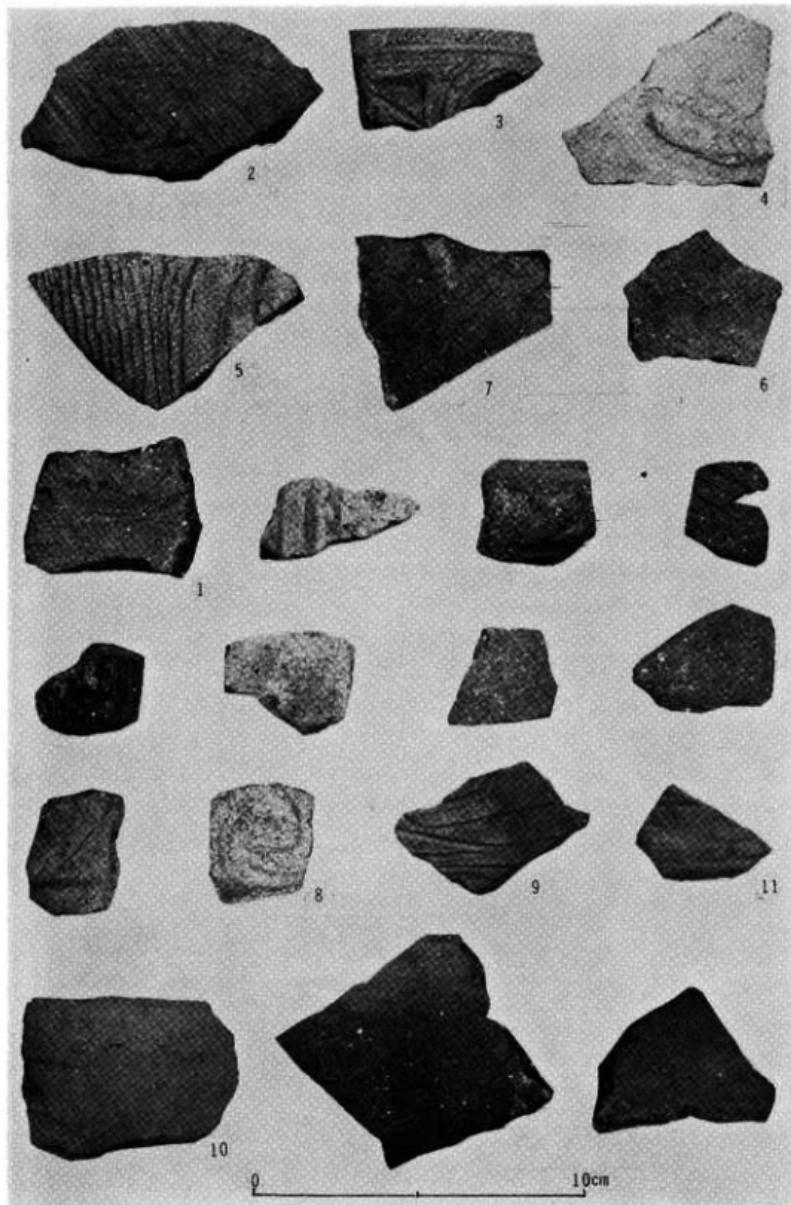
8 類 土 器 (10)

比較的薄手の無文土器で、器面は良く整形されている。おそらく7類土器に伴出するものと考えられる。

9 類 土 器 (11)

壺形ないし、注口土器の肩部と思われ、羊歯状の沈線文が描かれている。東北系の晩期大洞B-C式土器と考えられる。





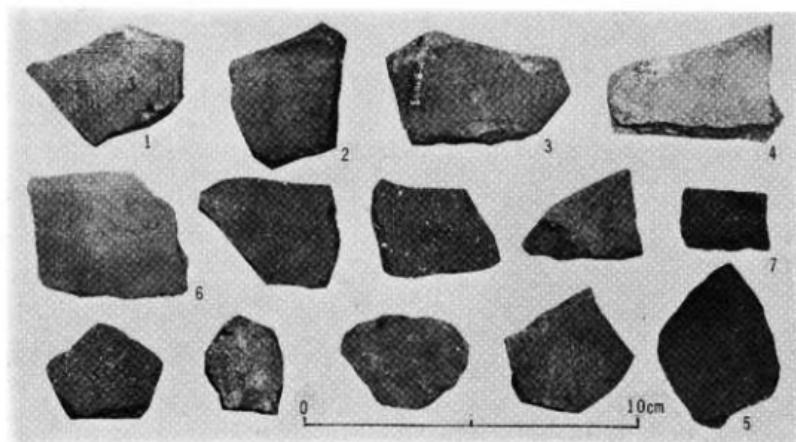
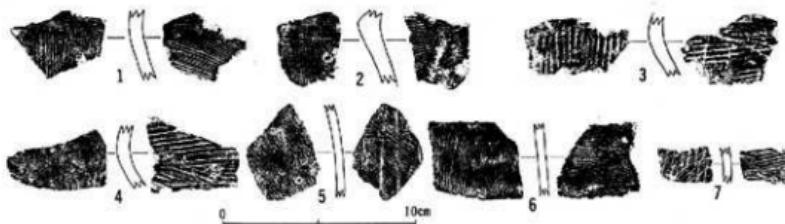
■ 弥生式土器（第7図）

いずれも細片にすぎず、全体的な器形、形態をうかがうことはできない。しかし壺ないし、變形の頸部は約4個体分を検出することができた。（1～4）頸部表面は縱に、裏面は横に、それぞれハケ目状工具による細沈線がつけられている点で共通している。

この表面はハケ目文のうえにヘラ状工具による格子状の沈線文がみつけられている。

頸部の屈折の部分で比較的厚いが(2)、ほかの部分ではうすい。

胎土中には大変細かい砂粒を含み、堅くしまっている。



C 土師式土器（第8図）

本遺跡からの出土品中では、最も多い出土量があり、本遺跡の主体となった時代であることは裏付けるものと考える。それでも原形をとどめているものは、1例があるだけで、いずれも細片にすぎなかった。そこでそれらについてのべてみた。

厳密には土師式土器として、その範囲に含めるには疑問の余地が残されている土器もあるが、分類上、この項に一括して説明してみた。

原形をとどめているものには、土壤中の底面から出土したものだけがあげられる(1)だけで、それ以外はすべて破片にすぎず、尖端可能なものも3個体(2~4)に限定されてしまった。

形態的には、杯形に限られて出土し、それ以外の形態のものは検出することができなかった。

胎土中には、若干の長石を含んでいるものがあるが、ほとんどの多くは、きめの細かい砂粒雲母粉末を含むだけで、あまり大きな含有物をもたない。

焼成は、いずれも良く、器面上に光沢をおびているものが多い。特に、2は裏面に、縦方向で、ヘラ状工具による整形痕がみられる。

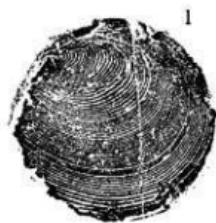
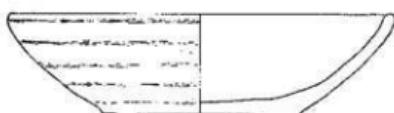
この整形痕は、良く研磨され、はっきりとみることができる。

制作は、輪づみで行なわれ、その痕跡を消すために、横なでで整形されている。

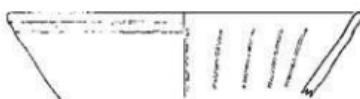
色調は、多くが茶褐色をしているが、焼成時の火熱のまわりぐあい、あるいはあたりぐあいで黒褐色になっている部分が目立っている。また二次的火熱を受けて黒褐色をしたものもある。その場合のほとんどは、器面がややザラザラしている。また一部には灰褐色をし、須恵質に近いものもあるが須恵器の堅さとは全く異なっている。

出土土器の底部の多くは系ヨリ底を有している。

以上の形態から、土師式土器終末期の区分式と対比できるものと考えられる。



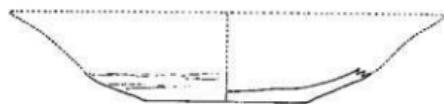
1



2



3

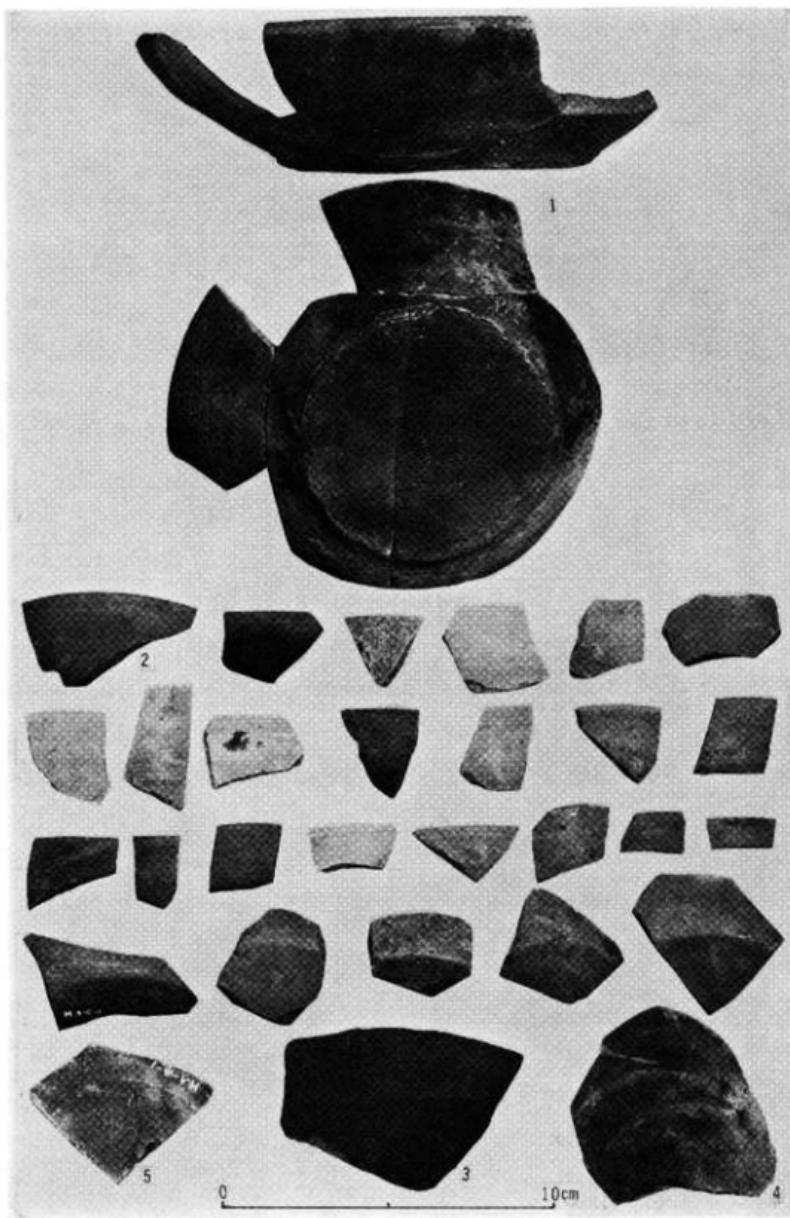


4



5

0 10cm



(D) 陶器古銭および石器（石鎚）

陶 器

擦鉢の破片が、最も多く出土し、そのほかに、灰釉のついた壺（写真右隅）の腹部破片がある。

これらの陶器は、土師器との関連性で明確にできなかった。

古 銭

出土した古銭は三種四個あった。それらを左から次のようになる。なお（ ）内は初鑄年代を表わす。

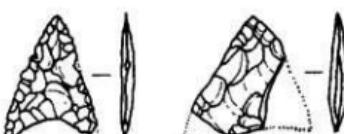
1. 熙寧元宝（1068年）
2. 攻和通宝（1111年）
3. 永樂通宝（1408年）



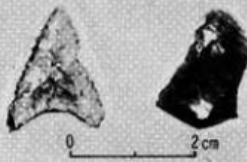
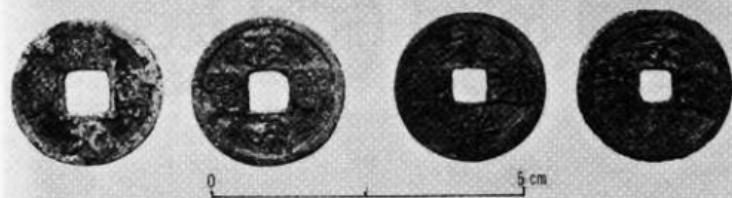
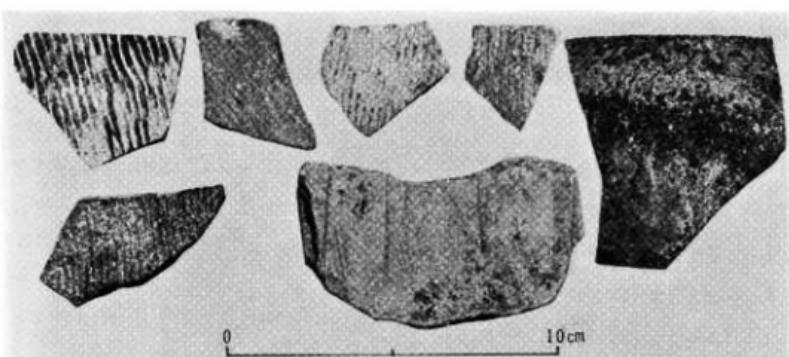
第9図

石 鎚（第10図）

1、2とも黒曜石製であり、1は抉入を有し、周辺に丹念な剥離を加えている。2は両わきが破損しているが、尖端は鋭利になっている。



第10図 石鎚実測図



(E) 石 器（石斧凹石および磨石）

本遺跡より出土した石器は数少なく、わずか13点の出土であった。打製石斧8点、石錐2点、石臼1、磨石1点、凹石1である。

しかし、これらの石器は、そのほとんどが単独でグリッドより出土したもので明確に遺構からの出土は石臼1点のみであった。

すでに石錐については4、でのべてあるのでここでは省略し、石斧、凹石、磨石についてのべてみた。

打製石斧（第11図1～6）

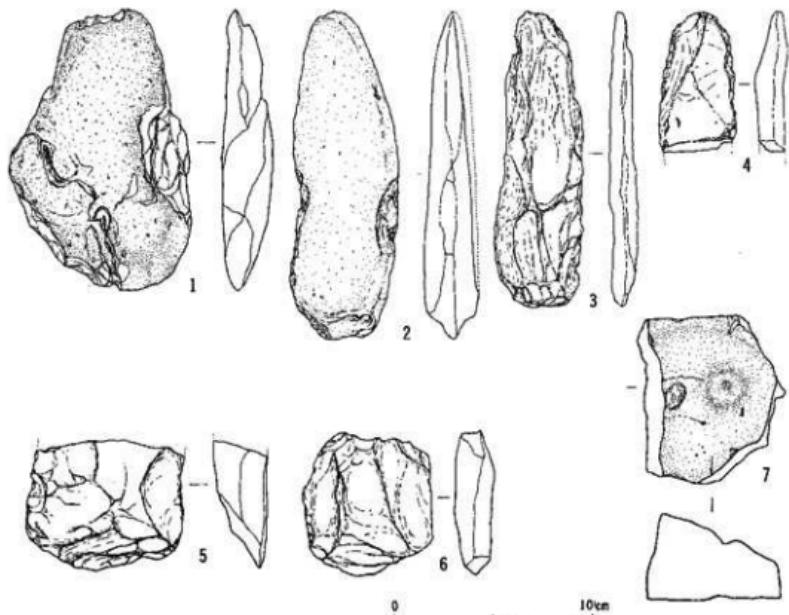
1は石器の両面に自然面をそのまま残し、先端のみを打ち欠いたものである。2・3はたて長の縦の自然面を片側に残し、刃部にのみ剝離を加えたものである。4は刃部を、5は基部を欠損したものであるが共に短冊形であったと思われる。6は・剝離形態から見て、石斧よりスクレーパー的な要素をもった石器かもしれない。

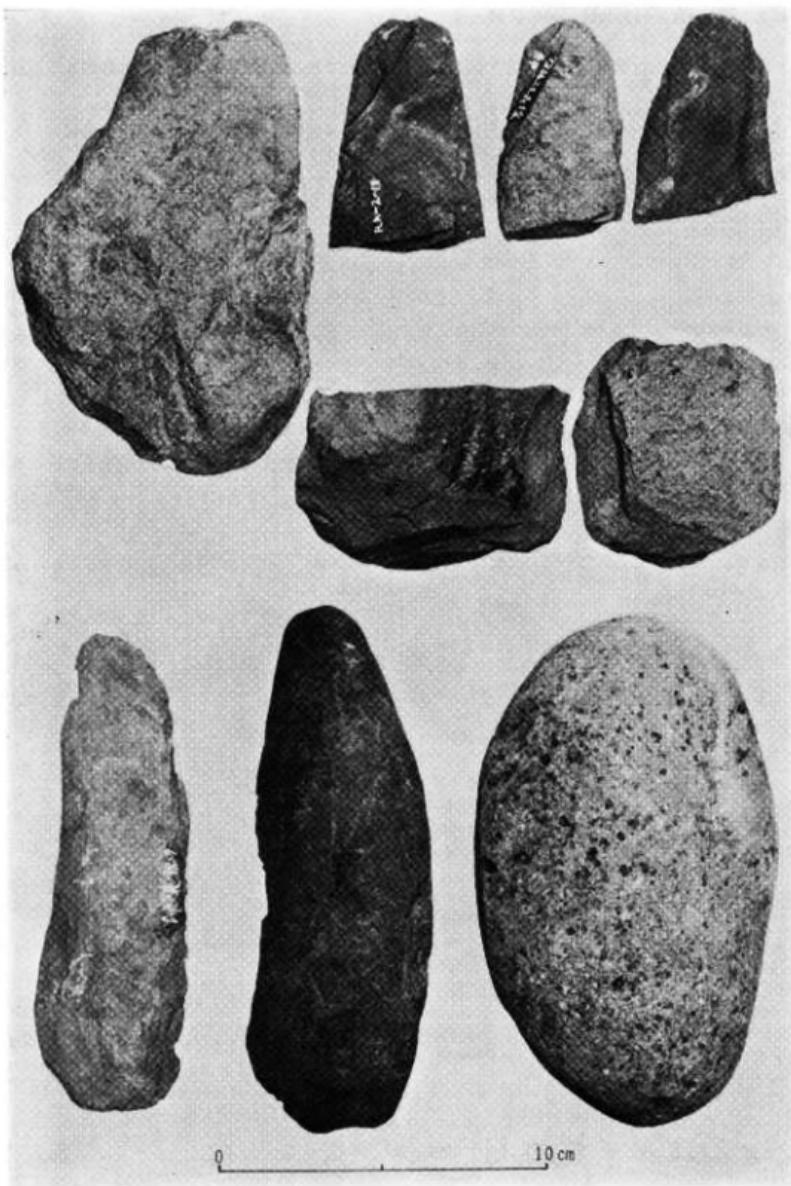
凹石（第11図7）

周辺をすべて打ち欠かれた石の両面に約1.5cmほどの鋸状の孔を有し、火熱を受けた様子も見られるが、断面や石面を見ると石皿であったかもしれない。

磨 石（写真）

磨石でも全面的に磨かれているのではなく、一部のみであり、一時的に使用したものと思われる。





(F) 石臼(石臼、布、木の実)

出土した石臼は上臼で、推定による径は31~32cmを予想する。厚さは最も厚い縁部で14cmを数える。「こくくばり」あるいは「こくおとし」とよばれる穀物を落す孔(直径約4cm)がみられる。

縁部は約4cmの巾で厚さ2cmでめぐっている。底はややえぐり込まれ、「日」が4本の条を対にして描かれている。それは必ずしも規則的とはいえない。

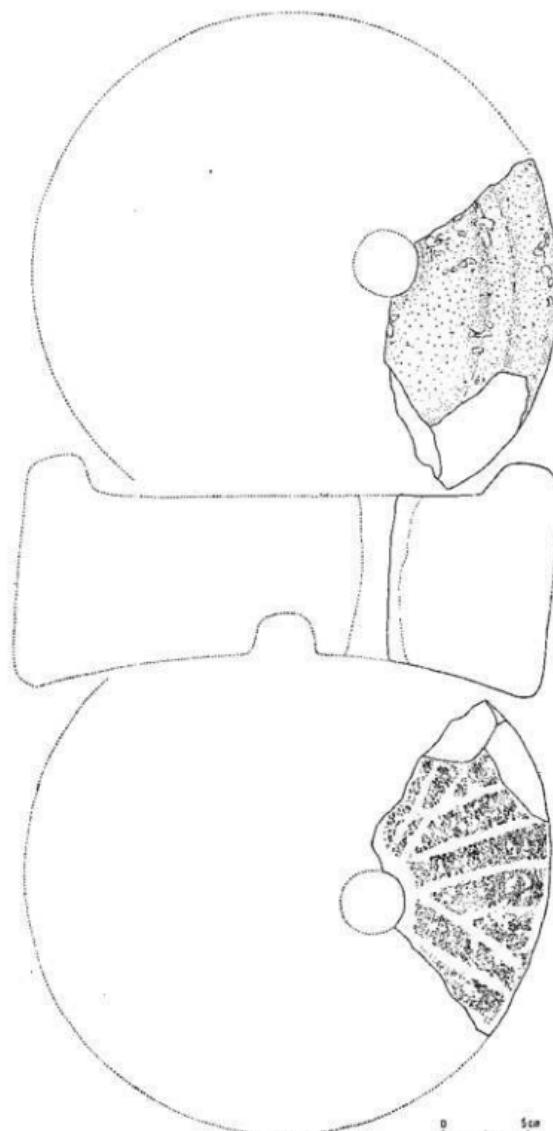
地下式土壤下底面から出土。

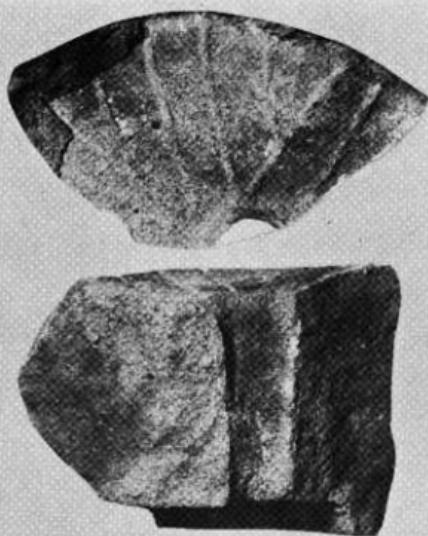
布

炭化した布で、麻製である。

木の実

炭化尖は2点あり、クルミと桃と考えられる。





0 10 cm



0 2 cm



0 2 cm

6. ま と め

以上各遺構、遺物に分けて説明をしてみたが、それらを要約すると次のようになる。

1) 繩文時代は前期・中期・晚期の土器、石器が断片的に出土した。

かって、昭和38年度作成の分布調査時での縄文時代後期の遺物は検出されなかった。

2) 弥生時代（後期末に帰属できると思われるが、明確にはできない）の小破片が少量出土した。

3) 土師器は終末期に所属すると考えられる环形土壙が出土した。

4) 歴史時代の陶器片、古錢が少量確認された。

5) 遺構では、土師器の伴う地下式土壙および竪穴住居跡の一部が確認できた。

また地下式土壙から麻布の炭化物が発見されたことは注目してよいだろう。

このように各種時代の異なる遺物が出土したが、縄文時代、弥生時代の場合は、遺物包含層は今回の発掘地点の北側山地側の傾斜地に多く採集されていることから、道路敷設地はその中心地をさけているものと考えられる。そのことからも、今回の出土遺物の多くは、その北側の傾斜地から流されたものと看取される。

よってこの地区では、地下式土壙、住居跡の構築された時代が、最も中心となったことだろう。

そこでその土壙について若干のべてみたい。土壙下底面に接して人頭大の石が数点奥壁に近い部分で出土した。そのうちの一つに、いわゆる「石臼」が確認された。上臼と下臼とに分けられるが、出土品は上臼で、穀物を落す孔がみられる。裏面は「臼」が4本の条を単位としてつけられている。

また土壙下底面から、环一個が出土した。この土師器が、この地下式土壙の時期を決定する唯一の資料といってよい。环は土師式土器終末期の区分式に相当するものと思われ平安時代に所属するであろう。

したがって、上記「石臼」も同時期のものと考えられよう。このような「石臼」が出土している遺跡は比較的外く聴いているのだけど案外その文献は少ない。その中で、東京都清瀬市清戸下宿遺跡の調査報告（加藤晋平、雪田孝他1969）は大いに参考になる。それによると、昨今出土しているもの多くは、中世以降のものであり、奈良、平安時代の出土例はないようである。

したがって、本遺跡もそれに順じれば、出土土器も中世以降の所産と考えなければならない。

しかし、出土土器は土師器終末期に位置すると考えられるところから「石臼」も同時期とみてよいだろう。

また「臼」の配列状態は、かならずしも整然としていないし、やや粗雑な観もある。今までの出土例では、最も古い例といえるだろう。

いずれにせよ、今後の類例に待つところが大きい。

原平遺跡発掘調査団名簿

調査団長	井出佐重	川崎義雄		
調査	金田頼貞	矢崎勉	池田敏雄	重佐豊
	依田明	小林岳	中村憲子	佐藤威夫
	金森辰攻			
	鈴木武雄	奥隆行	小林利久	
参加者	国学院大学	杉田弘	伊藤光則	田中純男
	東洋大学	山田行輝	同志社大学	武川慎一
	駒沢大学	田中悟		
	都留文科大学	竹内清志	田村正和	
	玉川大学	小佐野保子		
	その他	瀧口清	河内茂貴	小林誠
都留高校	島山照美	藤本和美	石井よう子	長橋芳文
	白川喜昭	上条敏広	小林しげみ	長谷川正光
	小俣育美	三輪奈津子	船橋久	酒井理津子
	込江秀子	久保井理堵	田村貴美枝	小俣三千代
	白倉強	小俣直美	野沢和代	飯島章夫
	杉山正文	岡本五朗	安藤正文	尾形忠
	岡部米親	石井利安	鈴木高雄	清水俊子
	伊奈みつ代	上条一雄	東山隆司	望月千恵子
	清水ゆかり	小俣三重子		
吉田商校	鈴木恵子	国学院付属高校	前田典子	
一般	高橋直博(下和田小)			
	大月東中学校生徒	平和中学校生徒		

昭和50年3月25日印刷

昭和50年3月31日発行

山梨県中央道埋蔵文化財

包蔵地発掘調査報告書

—大月市地内2—

発行所 日本道路公団東京第二建設局

山梨県教育委員会

印刷所 島南堂印刷所

